

BCJA Newsletter, issued biannually, published by the British Council Japan Association

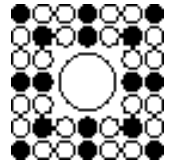
2, Kagurazaka 1-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0825

Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 12

September 30, 1999



BCJA 主催 Mike Barrett 氏歡送会報告

6月11日銀座、交詢社において、プリティッシュ・カウンシル駐日代表 Mr. Mike Barrett の歡送会が開かれました。180名の会員の皆さまからご寄付をいただき、当日は、57名の会員が出席しました。Charles Humphrey 代理大使、次期代表 Mr. Terry Toney にもご出席いただき、盛会となりました。長年にわたる多大な功績に対するお礼の意味を込めて、平 BCJA 会長より記念品（尺八と横笛）が贈呈されました。寄付の残金8万円ほどを Barrett 氏の希望で、BCJA Newsletter に寄付していただきました。（青柳昌宏）



(写真：British Council 竹安氏ご提供)

Message for BCJA Newsletter

The former British Council Director Mike Barrett

The reception which BCJA members so kindly hosted for us on June 11 in the splendid surroundings of the Kojunsha Club, thanks to Professor Ando, was a wonderful send-off from Japan for me and a warm welcome for my successor, Terry Toney. I have always valued and enjoyed the friendship of BCJA members, as people who really can act

as a bridge between Britain and Japan, but the personal kindness and generosity you have all shown to my wife and myself is truly overwhelming. You not only made possible that enjoyable party, but also subscribed to a magnificent gift in the form of a beautiful *shakuhachi*, chosen by Dr Taira, which I have already started to enjoy and will practice more intensely once I have time back in London. I will not promise to give a public performance when I am next in Japan, but music will be one of the best ways for me to keep in touch with Japan and our Japanese friends. Along with the meditative *shakuhachi* came a kit to make a *yokobue* as well, so I will be able to join in the *matsuri* for the year of Japan 2000 in Britain. Thank you all very much - I will be thinking of the BCJA with every breath!

For me, the *shakuhachi* represent many of the best aspects of Japan. It is essentially simple and natural, but, in the hands of a master, it can produce highly sophisticated and powerful music. It demands concentration, dedication, effort and special techniques to realise its full potential. It is unique to Japanese culture, and yet its sound is universal. It is demanding, but rewarding - like working in Japan!

It is difficult for us to leave Japan after spending almost half of our working life in this country. We first arrived in 1970, when I was seconded to NHK television to write and present a weekly English programme. Whatever images we may have had of Japan in our minds quickly disappeared as we were faced with the reality coming in from Haneda. Those were the days of heavy air pollution in Tokyo and left wing demonstrations in the Ginza, where the police teargas mixed

with the traffic fumes. But there were also *sento*, *geta*, *semi* and a few wooden houses still left to charm us, even if we could not buy cheese, marmalade or shoes for our large feet!

Now there is nothing you cannot buy in Tokyo and it is a great cosmopolitan centre of international activity, and even if there are not so many traditional elements left, there is plenty of vibrant cultural and intellectual activity. We have been privileged to share this through our contact with Japanese scholars, artists, scientists, educators and administrators, many of whom are BCJA members, of course.

It was my conviction when I came back to Japan in 1993 as Director of the British Council that we had to increase our impact and outreach beyond Tokyo and Kyoto, and also extend our contacts beyond the (very important) academic community. Thanks to the encouragement and cooperation of many people, we now have centres in Sapporo, Nagoya, Osaka and Fukuoka. Our joint seminars and conferences with Japanese organisations on social and environmental issues are attracting ever greater attention from the public and the media. There are now about 15,000 Japanese students on medium to long term courses in Britain, and about 50,000 visit each year for short courses in English and other subjects. Our own English Teaching centres are doing well and more Japanese candidates are taking Cambridge and IELTS English tests. After the enormous success of the UK98 festival, our cultural work is taking a new turn and promoting more popular culture, including film, design, football and fashion as well as literature, art and theatre. We were shocked to find in a survey last year that the UK is not well recognised as a centre of scientific excellence, so our work in science and technology is now designed to inform the younger generation in Japan as well as facilitating links between researchers.

British Council Fellowships are no longer as suitable or necessary to promote these links as they used to be, so the traditional BCJA member may become a dying breed! But the BCJA has also moved with times and has welcomed representatives from the other UK university alumni associations now established in Japan as well as the Foreign

Office "Chevening" Scholars and others. I am sure that this is the way forward. We need to form links between all those who have an interest in the UK-Japan connection and the availability of databases and Internet sites is going to change the scope and style of the relationship which the British Council has with our contacts. But the BCJA still has an important role to play in advising and supporting us in our activities, as you did notably last year with the production of the BCJA Book. I am sure that you will continue to give Terry Toney the kind of help you have given me in the past, and I know that he shares my tremendous affection and respect for you all.

Thank you for everything. I wish you all good health, success and happiness for the future.

Chairmanを退いて

前Chairman of BCJA 中村高遠

会長をお引き受けした1997年4月からの2年間、Committee Memberの先生方はじめ会員の皆様にご支援を戴きありがとうございます。

短い期間でしたが振り返ってみると、いろいろなことが思い出されます。会長としての最初のCommittee Meetingは6月、台風の直撃を受けて東海地方のローカル線はほとんどがストップしてまった日でした。ところが驚くことに世界に誇る新幹線、多少の遅れはあるものの運行中とのことで、大荒れの天気の中を東京に行くべきか、それとも電話して延期をお願いしたほうがよいか、ずいぶん迷いました。結局、Constitutionの見直しについてどうしてもご意見を伺う必要があり、風雨が激しい中を東京に向かいました。BCの吉田和子さんが心配されて会議を延期するかどうか自宅に電話をされたそうですが、すでに新幹線の中でした。Barrett名誉会長の奥様には、「台風の中を東京まで来た勇敢な人はどなた」と訊ねられて少々恥ずかしい思いをしましたが、そのときから議論を重ねてConstitutionの変更をAGMに提案することになったことはご承知のことと存じます。

11月には、前々から議論していたBritish Festival UK'98への参加について記念出版事業を行うことをAGMで提案しました。短期間に執筆の協力が得られるかどうかと出版費用を心配する意見がありましたので、瀬川彰久編集委員長の発案で原稿募集を兼ねた年賀状

をお送りしました。その結果、予想以上に反響があり、予定したページ以上の原稿と出版に必要な寄付が集まり安堵しました。励ましのお手紙をくださった方もあります。すべてが順調に運んだのは、BCから与えられた貴重な英国留学の経験を、何かの形で返したいという会員の皆様の熱い気持ちの表れだろうと思います。

忘れてならないのはBarrett名誉会長と吉田和子さんです。Barrett名誉会長は、BCJAの活動をよくご理解くださり、Committee Meetingにはいつもご自宅をご提供くださいました。少しの時間アルコールと雑談を楽しんだ後の会議はとても和やかな雰囲気でした。記念出版では、巻頭言をご執筆くださったばかりか、浜松にお招きして"Studying in Britain"と題してお話されたときの講演料を全額寄付してくださいました。このようなご支援に心から謝意を表したいと思います。

吉田和子さんにはCommittee Meeting、AGM、レセプションのお世話のほかに、会員のデータベース化のお仕事もして戴きました。データベース化はBCのDirector GeneralであるHanson卿が来日したときに話題になったもので、日英交流に役立ってほしいと願っております。もちろん、記念出版に関する雑務も引き受けて戴きました。私の書いたCommittee Meetingの議事録原稿(英文)を直すのにもさぞご苦労なされたことと思います。今年6月に、お二人揃ってBCをご退職なさったのは寂しい限りです。

最後になりましたが、BCJAへの夢を述べさせて戴きます。BCJA会員のリストを拝見しますと、それぞれにいろいろな才能をお持ちですので、毎年多くの方が研究活動のために繰り返し英国を訪れているのではないのでしょうか。もし、その中からボランティアを募ってこどもを対象にした英国版課外授業のようなものができたらどうでしょうか。記念出版のとき以上の貢献ができると思います。

2年間、Committee Meetingの日は必ず浜松へ帰る9時25分のひかりの指定席を予約し、浜松-東京を日帰りするスケジュールでした。それでも専門分野の違う多彩な方々と談笑することの新鮮さと楽しさを味わうことができました。BCからGrantsを戴いたときは別の意味で勉強になり、視野が広がったことも確かです。これからは一会員として平孝臣会長の下で、BCJAの活動に協力できればと思っております。

(NAKAMURA Takato, 静岡大学工学部, Brunnel University 1987-88)

イギリス人は幽霊がお好き (その4)

佐藤茂男

今回は、お約束したとおり、ストランド街にあるクーツ銀行に出入りする男爵夫人の幽霊の話と、かの有名なF・ベーコンの世界最初の冷凍ヒナの実験にまつわるヒヨコの幽霊の話の2つをご紹介します。

(1) ストランド街の幽霊

アラン・デント氏は演劇や書籍関係の評論家として著名な方である。彼はクーツ銀行のちょうど東側のストランド街でバーデット・クーツ女男爵の幽霊を見た時の体験を私に話してくれた。

それは、第二次大戦中の太陽がギラギラと照り輝く6月のある朝のことであった。前夜爆撃を受けたロンドンでは、労働者たちが晴れ渡った夏の空の下で瓦礫や割れたガラスなどの後片づけに精を出していた。突然、アラン・デント氏は目の前を歩いていく一人の老貴夫人に気づいた。貴夫人は黒のシュス、張り骨のついた小襟の下には白いレース、小さな黒い羽毛のついた帽子、ダイヤモンドのイヤリング、黒い靴、そして黒っぽいマフ《毛皮製の婦人用覆いで円筒状をなす。保温のため手を両端から入れて用いる》などを身につけていた。エドワード王朝風の、どうみても一風変わった奇妙な格好だ。彼女が歩いていたことは確かであった。幽霊は伝統的に漂うように動くといわれているが、そういうものではなかった。

デント氏はしばらく後をつけて行った。すると、以前に一、二度この貴夫人を見かけたことがあるような気になってきた。一度はロング・エイカーで、もう一度はオックスフォード・ストリートでであったが、しかしその時見たのはいずれの場合も貴夫人の後ろ姿であった。そこで今度こそは貴夫人を追い越し、振り向いて前の方から全体の姿をよく見てやろうと思った。彼は歩調を速め、彼女を追い越し、青白い顔を一瞥した。彼女は少しふくれっ面をしていた。特に急ぐわけではなかったが、しかし何かははっきりした明確な目的でもあるかのような様子で歩いていた。

クーツ銀行を過ぎようとする辺りまで来たところで、貴夫人の姿が二、三秒たらずのわずかな間ではあったがサッと見えなくなった。アランはある店の飾り窓のところで一旦立ち止まり、向きを変え、今来た道を再び戻ろうとした。ところが、なんとさっきの貴夫人の姿はすでにどこにもなかった。まったく何の跡形もなく消え失せ、銀行の端までずっと歩いて行っても目の前に人の姿は見えなかった。彼女は道路を横切ったわ

けでもなく、反対側の舗道にもその姿は見えなかった。

その瞬間は、道路のいずれの側を見てもタクシーも他のどんな車もまったく走っていなかった。きっとクーツ銀行へ入ったのであろうと思い、アランは銀行の入り口へと急いだ。ちょうど守衛が入り口のドアを開けようとしているところだった。時刻は朝の10時で、表玄関から銀行へ入っていった客はまだ一人もいなかった。

数日後、アラン・デントはロング・エイカーにあるパブの主人にこの不思議な出来事について話していた。すると、その話を脇で興味ありげに聞いていた一人の老人がいた。老人はアーサー・パウエルという洞察力に富むウエールズ人だった。彼は、アランが目撃したその貴夫人はきっとクーツ銀行を所有する女男爵のバーネット・クーツではないのかと言った。あなはバーネットが自分の銀行に入っていくのをたまたま目撃したのだ、というのだ。この老人は、かつて父親がバーネットの馬車の御者を勤めていたが、その頃彼女をよく見かけたことがあったので、アランの心霊体験の話の聞いているうちにそれはバーネット女男爵であることが直ちにわかったというわけだ。ただし、この女男爵、40年も前にすでに死亡していた人だった！

バーネット・クーツは、1881年まではC・ディケンズ、俳優のH・アーヴィング、ウエリントン公爵《ワーテルローの戦いでナポレオン1世を破った英国の将軍・政治家》、そしてヴィクトリア女王などとも親交のあった人だった。彼女は67歳で、かつて自分の秘書を務めた男性と結婚することになったが、相手の男性は40歳も年下のアメリカ人だったこともあって、ヴィクトリア女王は結婚を喜ぶどころか精神的な衝撃を受けられ、結婚後は一度もバーネットを訪れることはなかった。1906年バーネットが92歳で逝去された際、エドワード二世は、この女男爵は母親のヴィクトリア女王に次いでイングランド国内で最も非凡な女性であったと述べられた。

バーネット・クーツの家族の者たちは、バーネットの幽霊がイースト・エンドにも現れたという報告があることをアラン・デント氏に語っている。バーネットの幽霊が出たイースト・エンドは、実は彼女が生前に基金を寄付しベスナル・グリーン市場や一区画分の住宅地を造成させたところだ。

というわけで、アラン・デント氏はストランド街を歩いているといつもバーネット・クーツのことが思い

出され、是非もう一度会ってみたいものだと思うのであった。

(2) ポンド・スクエアのヒヨコの幽霊

ハイゲイトに古くからあった優雅なポンド・スクエアに、昔からヒヨコの幽霊が出る。何かに脅えたかのようにガーガーと鳴く、羽根の生えていない生き物の幽霊がこれまで何度も目撃されてきた。

この幽霊、実は政治家であり哲学者であるフランシス・ベーコンが大昔に行った実験で命を失ったヒヨコの幽霊だ。

国内最高の官職であった大法官(上院議長)を務めたことのあるベーコンは、1626年、65歳になっていた。彼は収賄と汚職が発覚し有罪となり、4万ポンドの罰金を課せられた上、ロンドン塔に幽閉され、終生にわたって公職や議席を追われた。それまでは政治家としてすばらしい人生を享受していた。哲学や科学の分野における彼の研究ははるかに時代を先んじていたが、最近になって自然科学に関心を向けるようになり、独自の方法で研究をすすめていた。彼の学問的方法は科学的資料を収集し、それらの資料から主要でない不随的な属性をすべて除去していく、そして、そういう作業を通して、隠されている宇宙の単一の法則を発見し、その本質的な原因を突きとめるというものであった。1626年3月のことである。ベーコンは雪の積もったハイゲイトを馬車で通っていた。彼の頭から科学的な疑問が一時たりとも離れることはなかった。そのひどく寒い日に馬車を走らせていたとき、馬車の車輪に踏まれて露出した雪の下の草が、どうしてこうも青々として新鮮なのかという疑問が突然わいてきた。雪が一種の防腐剤の働きをするのか。彼はただちに実験を試みることにし、村の池の辺りで馬車を止め、近くの農家から鶏のヒヨコを一羽買い求めるよう御者に命じた。

ベーコンは温かく身をつつみポンド・スクエアに飛び降り、御者に直ちにヒヨコを殺し、羽根をむしり取らせ、臍物を取り出させた。そうして彼は、まだ生温かい鶏の胴体を持っていき、中に雪を詰めこみ始めた。まわりに集まってきた土地の住民たちはびっくりした。彼はそれから鶏を鞆の中に入れ、さらに多くの雪を鶏のまわりに詰めこんだ。それは世界最初の冷凍ヒナであった。

ベーコンは一刻の猶予もなく実験をしたいと思うあまり、身を刺すほど寒いその日の天候を忘れてしまっていた。しかし彼はすでに若くはなかった。突然、体

がぶるぶる震え出し、ひどく咳きこみ、雪の中に倒れたのだった。ベーコンはポンド・スクエアの角にあった友人のアランデル卿の邸宅に運び込まれたが、そこで数日後息をひきとった。

ポンド・スクエアにこれまでベーコンの幽霊が出たとか、馬車とか馬の幽霊が出たという記録はない。ただ、半ば走っているような、半ば飛んでいるようなヒヨコの幽霊が出たという報告はいくつかある。ヒヨコの幽霊は羽根を半分ほど剥ぎとられ、円を描いて動き回っている。幽霊は真夜中の丑三つ時になるとブロック塀の近くに現れる。それはいつもきまって冬である。最近では、ここ数年間だけでも、震えるヒヨコの姿が少なくとも15回は目撃されている。しかし、現在、ポンド・スクエアで鶏のヒヨコを飼っている人は一人もいないというのだ。

ジョン・グリーンフィル夫妻は第二次世界大戦中、ポンド・スクエアに住んでいた。夫妻はこのヒヨコの幽霊を数回も見ている。「それは、でっかい、白っぽい鳥でした。内の家族でヒヨコの幽霊を目撃した者が多いです。月明かりの晩にね。家の向い側の木の低い枝にとまっていたこともあったわ」と、奥さんは報告している。

これもやはり大戦中のことであつたが、1943年12月、空軍二等兵テレンス・ロングとかいう男は、夜遅くポンド・スクエアを歩いていた。馬のひづめのような音や、馬車がギーギーときしるような音が聞こえてきたかと思うと、恐ろしい「キャッ！」という叫び声が出た。周囲をじっと見入ったが、すぐ近くであつたように思えたのに、さっき耳にした物音を発したと思われる馬の姿も何も見えなかった。すると、一羽のヒヨコが突然どこからともなく飛び出してきて、まるで逆上したかのように円を描いて辺りを駆け回った。鶏は半分だけ羽根をむしり取られ、両翼をバタバタさせながらガーガーと鳴いていた。寒さで震えているようだった。どこから出てきたのかなと思い、ロングはしばらくの間周囲を見回していた。もう一度振り向いてみると鳥はもう消えていた。間もなくして、空軍二等兵のロングは空爆警戒隊の火災監視員に出会った。その監視員は、ポンド・スクエア周辺でその鶏を長年にわたって見たことがあつたよと語った。また、1、2か月前のことだったが、捕まえようとするブロック塀に消えてしまったとも言った。

もう一人の目撃者は車の運転手である。サウス・グロヴあたりまで来たとき車が故障した。彼はポン

ド・スクエアまで歩いていき、電灯がまだ2階に灯されていた一軒の家に助けを求めた。それは1969年1月の夜遅くのことだった。ポンド・スクエアを横切ろうとしていると、何か動くものがあり、注意を引かれた。塀のある方角を見たところ大きな白い鳥が両翼をバタバタさせ、円を描いて走り回っていた。最初はお化けが出たのだらうと思い、鳥の方へ歩いていった。更にもっと近づいてみると、それは羽根がほとんどむしり取られたヒヨコだった。運転手は、生きている鳥の羽根を面白半分にむしり取るなんて、随分残酷な不良少年もいるものだと思いながら、逆上する鳥から数フィート離れた辺りまで近づき周囲を見回した。しかし、ポンド・スクエアにはまったく人っ子一人りいなかった。そこで、もう一度後ろを振り向くと、鳥は既になくなっていて、なんの物音もまったくしなかった。

幽霊出現現象にはまるで電池が切れるかのように、時間の経過とともに切れてしまうものがあると言われている。おそらく、ポンド・スクエアのお化けヒヨコも、あれから300年も経たない現在ではだんだんと衰えてきているのかもしれない。ヒヨコの幽霊が1969年に出現した時には、もはやまったく物音がしなくなっていた。1970年2月、若いカップルは、大きな白い鳥がほぼ丸裸の状態でどこからかやってきて近くの地面に落ちてきたのにびっくり仰天した。恋人たちは最後の「おやすみ」の挨拶を互いに交わしているところだった。白い鳥はどんな音もまったくたてずに何度か円を描いて羽ばたいた後、暗闇にスッと消えた。

* * *

今回の幽霊屋敷巡りはこれでどんとはらい。次回はP. Underwood (1975) のご案内で、セント・ポール寺院近くの幽霊屋敷を2箇所巡る予定です。どうぞお楽しみに。

(SATO Shigeo, 東北学院大学教養学部教授、University of Wales Institute of Science and Technology 1968/69)

[佐藤茂男氏は平成11年7月9日に逝去されました。ご冥福をお祈りします。編集部]

わが師マキアヴェッリ

橋都浩平

この題名を読んで「おや」と思われる方が多いのではないだろうか。なぜBCJAニューズレターに英国とは関係のない、また英国的とはほど遠いと考えられる思想の持ち主、マキアヴェッリが登場するのかと。

この文章を書いたきっかけは、先年亡くなったオックスフォードのアイザイア・バーリンの著作集の中の『The originality of Machiavelli』を読んだことにある。アイザイア・バーリンのようなある意味できわめてまっとうな思想家が、マキアヴェッリのような特異な思想家をどのように評価しているのかに興味をおぼえて読んでみた。

わが国ではマキアヴェッリの著作や思想よりもマキアヴェッリズムという言葉の方が有名で、ひとり歩きしているように思える。実際彼ほど様々な、多くは否定的な評価を受けている思想家も珍しい。バーリンの著作の第1章では歴史上、彼がどのような評価を受けているかが述べられているが、そこに引用されている著作家の数は何と85人に達している。彼の思想がどれだけ多くの人から注目され、評価されているかがわかる。その中にはスピノザ、ヘーゲル、マルクス、クローチェ、グラムシなどそうそうたる思想家が含まれている。こうした偉大な思想家達もマキアヴェッリの思想をどう捉えたらよいか逡巡しているようであり、その評価は実に様々である。

一般的にはマキアヴェッリズムというと、政治の世界においては目的のためにはすべてが許される、とする思想と理解されている。しかし彼が強調しようとしたのは、果たしてその事なのであるか。バーリンはそうではないという。実際にマキアヴェッリが、とくに『君主論』において強調しているのは、個人のモラルと政治のモラルは決して一致しないということ、それを一致させようとする事そのものが政治の昏迷を招くということである。とくに彼が非難するのはキリスト教のモラルで政治を行おうとしたり、政治的な行動を批判しようとする事である。それに対して彼はローマ共和制の精神、モラルを極めて高く評価している。

バーリンはマキアヴェッリが、ひとつのドグマによりすべてを律しようとする態度に異議を唱えたことを高く評価している。ひとつのドグマで政治を行おうとすれば、必ず目的が制度化され、それに至る手段についてはある程度は目をつむるということになりがちである。これは20世紀の共産主義も含めた全体主義国家において顕著に現れ、われわれもその教訓は嫌と云うほど学んだはずである。マキアヴェッリは政治においてはすべてが許されるとしたのではなく、ひとつのドグマにより政治を行う事を否定したことにより、多元論への道を開いたというのがバーリンの評価である。

こうしてみると英国的な思考とは対極にあるように見えたマキアヴェッリの思想にも、ドグマの否定や多元論的な思考など、意外と英国的なものを含んでいるように思える。これがバーリンがマキアヴェッリを取り上げた理由のひとつであろう。

塩野七生の『わが友マキアヴェッリ』によれば、マキアヴェッリ本人は決して冷徹な人間ではなく、ユーモアのセンスもあり、人生を楽しむ余裕も持っていた人物だったようである。塩野七生のこの書物に続き、同じ著者による『マキアヴェッリ語録』、さらに筑摩書房から全集も現在刊行中で、彼に対する関心はかつて無いほど高まっている。私はまだ塩野氏のように「わが友マキアヴェッリ」とはとても呼べないが、「わが師マキアヴェッリ」として、『君主論』『ローマ史論』をもう一度新しい目で読み直してみようかと思う。(Kohei Hashizume, 東京大学医学部小児外科教授, Birmingham Children's Hospital, Birmingham, 1982/83)

ケム川の流れば絶色えずして一(7)

池島大策

ブリカン・フェロースhipのお陰で、イギリス文化について考えさせられる機会に恵まれたということは、これまでも度々書いてきた。今回は、名前と肩書きについて感じたことの一部を記してみたい。いつものことながら、自分の経験や感想を一般化するつもりは毛頭ない。むしろ、それが果たして自分のいた環境(ケンプリッジという)や状況などに左右される特殊なものなのかが、今の自分の関心の中心にある。日本では、「さん」とか「先生」という非常に幅の広い言い回しによって、相手を呼ぶことができるように見える。しかし、ファースト・ネームで呼び合う関係というのは、社会的にもコンテクストは確かに限られていると言えよう。他方、英国で感じたのは、ファーストネームで呼び合う関係が、社会的には色々な意味を持ちうるということであった。

我々国際法学者に関して言うならば、英国の教科書やモノグラフの本の最初の頁を開けると、著者名の前・後に勲章、称号、名誉ある会合等の所属の敬称をつけて書いてあるのをよく日にする。例えば、オックスフォード大学のイアン・ブラウンリー国際法教授の教科書『国際法・第5版』には、Ian Brownlie, CBE, QC, FBA とあって、そのあと、「オックスフォード大学国際法教授 (Chichele Professor, オックスフォード・オール・ソールズ・カレッジ (All Souls) ・フェロー、国

国際法学会 (Institut) 会員、国際法委員会 (ILC) 委員」とある。まず、岩波新英和辞典 (1981 年) によれば、CBE は Commander of the British Empire (第3級大英帝国勲爵士) とあるが、QC は Queen's Counsel (女王勅任弁護士) そして FBA は Fellow of British Academy (英国学士院会員) とでも訳すのであろうか。これらの称号は、いずれも非常に名誉あるものであり、いわば国際法学者としてのみならず、英国の学界の頂点を極めたと言っても過言ではないだろう。また、上記の国際法学会は、正規会員が 60 数名に限られた、120 年に及ぶ伝統と歴史を誇る世界的な国際法学者の権威ある会合である。この他、彼の場合は、DCL (Doctor of Civil Law) などの博士号や名誉学位なども多く持っている。彼の持つこうした称号は、いわば例外的な場合でもあるし、一般化できるものではない。しかし、正式の手紙や文書での宛名や氏名を書く際には、こうした敬称・称号などをどこまで書けばいいのか迷うこともある。大学で教授、助教授、講師、助手として教えていけば、Professor の称号をその地位の高低に関係なく、敬称として付す場合も少なくないようである。ただ、英国の大学での正教授 (Full professor) は、ポストとして非常に限られているし、オックス・ブリッジのように女王勅任講座 (Regius Professor) や、冠講座の教授職は、各教科一つだったり、又は場合によっては存在しない場合もある。そもそも、カレッジのフェローというポストさえ、分かりにくいシステムである。従って、大学の Reader とか、Senior Lecturer とかのポストの人には、博士号を持っていれば、Doctor と呼ぶしかない (但し、社会的に、Professor と呼びかけたり、この敬称をイ寸すことを妨げない)。しかし、博士号のない先生には、Mr. と呼びかけざるをえない。この Prof. であるか、Dr. であるか、Mr. であるかの差は、我々学問の世界供英国は言わずもがな、広い社会的な意味では、恐ろしいほどに厳然として存在する、というのが実感であるし、当時でも、一緒に研究・勉強していた仲間内の共通の認識であった。

また博士号にも、Ph.D. とか D.Phil. (後者は特にオックスフォードで出される課程博士学位) とかの別があり、そのあとにオックスブリッジに関してだけは、それぞれ Oxon. とか Cantab. (間違っても、後者が Canterbury 大学の学位かと思っはいけない。) とかを付けた名称を文書に書いていたり、そうした名刺を刷っている人が少なくない。ある時、ガートン・カレッジ (Girton) のフォーマル・ダイナーに呼ばれた際

に、ハイ・テーブルに同席した女性のフェローは、いわば「ディプロマ・コレクター」(diploma collector) (学士、修士の学立から、博士号、名誉学位などを複数持っている人をこう揶揄する者もいる) よろしく、自分の持っている学位をたしか 5 - 6 個、自分の名刺に書き連ねていた。こうした機会には、「イギリス人でも名刺を持っている人はいるのか - 」。」「こうした肩書きは、略号として (BA, MA, LLB, LL.M, MPhil, etc.) こうやって書き連ねるだなあー。」などと感心したものである。しかも非常に興味深いのは、オックス・ブリッジの学部卒業生に限って、学士号 (BA) が、確か卒業後 3 年間だけ経過すると、自動的に修士号に変わる、というのを友人に教わった。彼が言うには、「この 3 年間にクリミナル・レコードがなければ、誰でもこうなるんだからなあー。」

しかし、こうした肩書きに Sir とか Lady などの称号とかがついたりすると、もう日本の慣習にはないものであるから、我々としても対応に困る。かのビートルズのポール・マッカートニーは今やサー・ポールと呼ばれるし、エルトン・ジョンも新聞ではサー・エルトンと書かれている。2 代前のケンブリッジ大学国際法講座教授 (Whewell Professor) で、国際司法裁判所長官を務め、上記の国際法学会会長などの要職を歴任したジェニングス教授 (Sir Robert Jennings) は、よく Sir Robert と呼ばれていた。Sir の称号のある人には、そのファーストネームをつけて、Sir Robert などと呼ばべ良い、とよく言われる。しかし、我々が実際に手紙などで宛名書きはどの肩書き・称号を用いていいのか困るだろうと思う。彼自身が私に送ってくれた或る論文のコピーには、Robbie Jennings とだけ、サインしてあった。このような世界の国際法学界の頂点を極めた人物に対して、ある時、一人の駆け出しの国際法学者が、自分のことを紹介するのに、衆人環視の中で、'My name is Professor doctor xxx.' とやったものだから、廻りが愕然とした、という話を人づてに聞いた。彼の癖なのか、常識に疎いのか、彼はいつも誰に対してもそうするそうである。こういう風にすべての肩書きを付けて自己紹介するやり方に、違和感を感じ、眉をひそめる人は多いだろうし、時と場所、ましてや、相手を選ぶべき時もあるだろう、という訳である。そういえば、別の機会に、スイスの友人、セルジュ (Serge) が、「自分のことを博士呼ばわりして自己紹介したり、自分の名刺の名前に、'Dr. xxx' とすることほど愚かなことはないよなあ。」と、ある学会の際に名刺交換を色々な

人とした後に言っていた。彼の名刺には、自分の名前の 1 行下に、1 数段ポイント下げた活字で 'docteur en droit' と謙虚に書いてある。ヨーロッパでも、フランス（語圏）では、専ら相手に対して 'Monsieur xxx' と呼びかけ、また 'M. xxx' とだけ記し、教授とか博士とかを名前に付けないことの方が一般的なように思われる。ある人は、「誰でも学校の先生なら professeur さ。」と言っていた。しかし、「ドイツでは、これらの肩書きは、名前の一部であるから、省略してはいけない、失礼に当たる。」と、ドイツ留学から帰った友人が教えてくれた。従って、博士号を二つ持っている教授（ドイツではざらにいるらしい）には、'Prof. Dr. Dr. xxx' としなければいけないらしい。

英国留学関連でブリカンが編集した昨年の UX98 記念出版『BCJA の本』の本の中でも既に紹介させていただいたが、私の通った教会の牧師ジョン・ピンズ (The Rev. Dr. John Binns) さんが、私を初めて自宅に食事に招いて下さったときに、'The Reverend Doctor Binns' と呼びかける私に、「そんな堅苦しい呼び方はよしてくれ。」と言わんばかりに、しかし、優しく、照れながら、教え諭すかのように、「ああ、タイ (Tai) よ、単にジョンと呼んでくれっジョンだ。」と言ってくれた。神の前では皆、平等ということなのか、やはりファーストネームで呼び合うことの爽やかさを改めて感じたものである。

ちなみに、私は、自己紹介する際には、専ら 'My name is Tai.' とだけ行って、名前を短縮し、しかも苗字を言わないことが多かった。これで通じることの方が多かったし、人間関係もむしろ円滑にいった。廻りとのつきあいでも、苗字が必要な状況は多くはなかったし、限られたフォーマルな場はそれとして、別の対応もあったからである。今では、自分の名刺でも、英語圏向けなら Tai Ikeshima, Ph.D. とするし、フランス語圏向けなら、前記のセルジユの方式で、Tai IKESHIMA, docteur en droit としている。私のいた研究所の所長（当時）エリ・ラウターパクト (Professor Eli Lauterpacht, QC) 教授（この教授職名はケム大に対する頭著な彼の貢献に対して付与された名誉称号）は、ついそケムの苗字を覚える様子なく、私を他人に紹介する際に、小声で、「タイ (Tai) よ、君の苗字は何だったっけ？」といつも訪ねた。むしろ、私としては、彼が私のことを「タイ」と呼んで、今でも身近に接してくれていることを非常に嬉しく、かつ名誉に思っている。

このように、相手と分け隔てなくファーストネーム

で呼び合うのは、いわばアングロ・サクソンの昨今の風潮であるとも言われる。ケンブリッジという場所、それに社会的意味合いや人間関係などの文脈を別にして、私としては、日本の環境の外において、「タイ」と呼ばれまた相手のファーストネームを呼ぶ関係に抵抗はないし、四半世紀も前から自分としてはそれを肌身こ感じてきたので、今ではそれが当然のような生活になっている。このジュネーブの地でも、こうした「ケム川の流れ」は絶えることを知らない。

(IKESHIMA Taisaku, ケンブリッジ大学 1994 / 95)

B. C. Scholar 1956

中島章

我々 16 名は 1956 年 8 月 15 日にテゲルベルグ号で神戸を出発した。途中台風に遭ったが 3 日後香港に入港、カントン号に乗り換えてシンガポール、ペナン、コロンボ、ボンベイ、アデン、スエズ、ポートサイドを経て 39 日掛ってロンドンに着いた。船がスエズに着いて、下船したタクシー 2 台でカイロを見物した。イスマイリヤへの途中 1 台が故障し 1 台に皆を詰め込んで無事船に戻る事が出来た。我々の次の便は中東戦争の為ケープタウン経由となった。当時日本の外貨は 20 億ドル位で、外貨の持ち出しは出来ず、円をこっそり持ち出して香港で 1 ドル 400 円で替えた（公定レート 1 ドル 360 円）。船が着くと飛び出して見物した。総てが新しく珍しかった。ドリアンを買って船室に持ち込み、何日も匂いに悩まされたりした。ロンドンに着いて、一週間 BC のオリエンテーションの後各々の行く先に散った。

私の滞在はロンドンであった。そこでは朝日新聞欧州総局長の森恭三さん一家と三菱商事支店長江森盛久さん一家とが我々留学生の面倒を良くみて下さった。森さんは、昔ロンドン滞在中クリスマスに行く所が無く、大変淋しい思いをした経験から、クリスマスには寿司など日本食を沢山用意して我々を招待して下さい。又、彼岸には江森さんのお宅でおはぎを戴くのが楽しみであった。当時ロンドン在住日本人は数百名で日本料理は一軒も無かった。BC スカラーの給料で休みには旅行を楽しんだ。

1986 年春、一緒に英国に行った石川俊雄さんと一年前の高柳和夫さんとが言い出してイギリス留学 30 周年を 1986 年 7 月 19 日夕方、パレスホテル 10 階クラウンレストランで 10 人程でやった。毎年やろうと云う事になって、その後毎年 7 月に集まっている。1990

年迄はパレスホテルだったが、1991年からは一緒に行った松本洋さんのお世話で国際文化会館で1955、1956、1957年に留学した仲間が20名余り毎年集まっている。森恭三未亡人妙子さんは招待に応じて時々出席して下さる。世話役の松本さんがこの程マンチェスター大学の名誉学位を貰われて、大変お目出度い事であった。

同じくマンチェスターにいった仲間の杉山忠平さんが1999年3月22日に永眠した。彼は一橋大学を出て静岡大学で経済学史を教え、後に一橋大学、東京経済大学で教鞭を取った。よくロンドンに出てきて大英博物館や図書館に通って居た。或る日、大変貴重な文献を見つけたが、ノートするには多すぎる、何か良い工夫は無いかと相談を受けた。私はお持ちの写真機で許可を得て複写したらと申し上げた。当時はゼロックス等は無かった。後で聞いたら無事全部複写して日本に送った由であった。また、古本屋で貴重な文献を見つけたと嬉しそうに話した事もあった。帰国して暫くして、経済学史の研究で40才代で学士院賞を受けた。英国出張と重ならない時は必ず会に出て旧交を温めて居た。一昨年から発病して、寝たきり、人工呼吸、動くのは眼と指先のみとなった。友人が見舞に行くと喜んでくれた。3月26日の葬式での2人の友人と一人の英国人の弔辞は参列者の心を打つ感動的なものであった(雑誌"未来" 1999-5, No.392, p.1-5)。BCの仲間も数人出席して野辺の送りをした。

(Akira Nakajima, 順天堂大学眼科教授, London, 1956/58)

懐かしい街

千葉 恵

久しぶりにクリスマスの季節にオックスフォードを訪ねた。D.チャールズ先生の十五年の歳月をかけた原稿750枚の労作『アリストテレスの意味と本質』が完成し、母校オリエールカレッジに寝泊りして、一週間共に仕事をした。この作品は次のミレニアムを導く仕事となるであろう。カレッジ図書館で、薄青の板張りの高いヴォールト天井とスタンドガラスの窓、オークの本棚を埋めた皮表紙の書物に囲まれて、午後の薄日が差し込むなか、近くの鐘楼が静寂を告げる中世的空間に身を沈め仕事をしていると、他に何もいないという落ち着いた気分になる。疲れた頭を休めるために街にでると、石造りの建物に闇がたちこめていく時刻の早さに驚いた。人々は、気にもかけずに買い物袋をさげながら明るい石造りの店からオレンジの街灯と

もる闇に吸い込まれていく。ひとつづつ個性をこめて彫りこまれた石の積み重ねによって造りだされた街。その個性と堅固さの表わす豊かさを冬の湿った濃密な闇が包んでいく。足音の響が止む。闇の一層濃い空間にセント・メアリーのスパイアーがそびえていた。尖塔の先は記憶に頼ってしか描けない。石に溶け込む懐かしい冬の闇と穏やかな小雨と教会の匂いが、フィルムのように記憶の連なりを巻きもどし、最初にこの街に立った日の驚きを蘇らせた。

1985年の春、誰一人知るひとなく、紹介状一枚をもってただ本場で学問をしたいという願いで武者修業にきた。「学問」の代名詞が刻まれた名前の駅舎の前に立つといくつもの搭や尖塔が羊雲の空と契りを結んでいた。八十数年前の漱石同様、膝栗毛の日々であったが、この街の人々の親切が、所期の志に五年の歳月かけて一つの形を与えてくれた。1990年の早春の早朝、わかれの散歩をしながら、街の四季の折々の情景を言葉に託して心に焼き付け、街に捧げ、そして街を去った。

・秋深い夕暮れ時にエルスフィールドの丘から見るあなたは厳肅だ。大きく赤い丸い太陽があなたの描くスカイラインのむこうに沈みゆく。夜と昼が、西の地平線で競う時、あなたは自分のシルエットをかすんだ白から茜色そして深い群青色へとカンヴァスの微妙な色合いに符牒しつつ描きかえていく。あなたの尖塔とピナクルはそのゴシックの気高さのうちにあなたを引き上げる。あなたは、臙な光に浮かびつつ、ただ白霞の上にそびえるセント・メアリーのスパイアーとなる。まるで天界への最後の証人がのこされているかのよう。・・・

あれから九年の歳月が流れた。この街を歩く時、私の心は恵まれた勉学の日々を思い返し、懐かしさに満たされる。七百年の歴史を貫き同じ志を持った人々が集い、真理の探究にいそしむその歴史を重ねてきた街。伝統は思想より強い。あなたの気風が密やかに人々の魂の底にしみこんでいく。懐かしさという感覚は同じ志と愛につつまれたことの想起に違いない。

(Kei Chiba, 北海道大学文学部助教授, Oxford University, 1985/90)

「和解の旅」に思う

中山幸子

戦後54年目の本年3月18日、ある会合に出席した。「和解の旅」と題した、ホ・ムズ・恵子さんの呼びか

けによるものである。第2次世界大戦中、日本軍の捕虜となっていた元英国人兵士とその家族を日本に招き、数箇所では日本人有志と話し合いを持つ趣旨のものである。毎年3月と11月に開催している。英国からの出席者、英国大使館代表者、外務省代表者によるスピーチは、「許すまい」、「忘れまい」の心情を乗り越えたい、そう願いたいと切望する建設的な内容の、格調の高いものであった。British English に囲まれた、30年近く前の英国留学時代を回想した。小さな町にも戦没者の慰霊碑があったこと、広島には人が住み草木が育っているのだろうかという質問されたことなどが思い出された。

私は戦争遺児である。父、中山成雄（まかやま・しげお）は、昭和14年2月初めに香川県で結婚し、6月14日、第11師団（善通寺）第1水上輸卒隊の一召集兵として、坂出港を出、中国江西省呉城鎮（ごじょうちん）に着き、その年の11月、湖北省漢口へ移動し第17碇泊場司令部で勤務、翌15年11月10日、漢口第15兵站病院伝染病分院で腸チフスのため戦病死した。27才であった。私が1才になる半月前であった。戦地から母と私に宛てた軍事郵便が63通、6年前に見つかった。戦友、部隊長、看護婦、衛生兵を初め、父を知る人をさがし続けている。戦争未亡人のまま、私が17才になった日の翌日、39才で癌のため世を去った母も、夫の最期を知りたくて奔走していたことを、つい最近知った。「探父行」は、まだ見ぬ父に近づくための唯一の手段である。

(Sachiko Nakayama, 東京都立荒川商業高等学校英語科教諭、University of Manchester, 1972/73)

「BCJAの本」特別販売のお知らせ

昨年企画した「BCJAの本」（風人社）の出版は、会員各位のご支援のおかげで、英国祭 UK98 公式イベントとして成功をおさめました。文系・理系・芸術系など幅広い専門領域の会員有志約60人が、自分の学問・職業、そして留學生活について語ります。留學先として、なぜ英国を選び、何を学んでくるかについての示唆多い本です。定価1800円（税別）ですが、出版社の好意により今回に限りBCJA会員特別価格で購入できることになりました。10冊単位5000円（税別。送料1000円）で販売します。本書出版の目的は、英国留學をめざす若い人への情報提供にあり、この機会にご購入いただき、近隣の方々に頒布していただければ幸いです。同封の郵便振替用紙に「BCJA

の本希望」とお書き添えの上お申し込みください。また、この種の情報が入手しにくい地方への本書の頒布も計画しております。BCJAにご寄付くだされば、手配いたします。この場合、金額はいくらでも結構です。「BCJAの本寄付」とお書き添えください。締め切りは10月末です。

[編集後記]

本号より編集長を引き継ぐことになりました。初代安藤正人先生、二代目平孝臣先生に続いての三代目となります。どうぞよろしくお祈りします。ニューズレター創刊を提案され刊行を常に支援し続けてくださったバレットさん、さらに刊行の実務を陰で支えてくださった吉田和子さんが同時に退職され、たいへん厳しい状況ですが、会員の皆様にはひきつづきご支援賜りますようお願いする次第です。私自身、急に編集長の指名をうけとまどっておりますが、3月にすでに副会長を拝命しており、この二つの責任をいかに果たすか、緊張しながら思案しております。私にはたいした才能はないので、西田宏子先生（根津美術館）と青柳昌宏先生（電子技術総合研究所）に編集委員をお願いし、ご快諾いただきました。お二人には次号で自己紹介していただく予定です。本号はとりあえず前号までの編集方針をうけつづき紙面を構成しましたが、これに加えて、バレットさん・トニーさんの歓送迎会の報告（青柳編集委員）と、バレットさん、中村前会長に退任のご挨拶をお願いしました。紙面作りの実務は青柳編集委員の手によるものです。次号より、新たな展開をめざして紙面作りを模索したいと思っています。英国留學とご自分の専門との関連など、多能多彩の会員同士の情報交換に役立つ玉稿を期待しております。ボランティア作業なので、なにとぞワープロでの原稿入力にご協力ください。

（瀬川彰久、北里大学医学部解剖、Imperial College 1989, segawa@kitasato-u.ac.jp）